

この場所に戻るために、6年間がんと闘ってきた。

今年6月30日。東京都港区の会社員、大久保淳一(49)は7年ぶりにサロマ湖100キロウルトラマラソンに出場した。がんになる前に4度完走したが、発病して青信号のうちに横断歩道を渡り切れないほどに筋力も体力も衰えたところからの再起戦だ。痛む足も、疲労がたまつた体も、大久保にとっては病人から一ランナーに戻れた証し。ゴールでは両手を天に突き上げながら、喜びをかみしめた。12時間39分。全5回の完走のうち、自身2番目の好タイムだった。

大久保がランニングを始めたのは、米シカゴ大学でMBA(経

営学修士)を取得後、ゴールドマン・サックス証券に入社した35歳の頃。営業に行つてもなかなか相手にしてくれない生命保険会社の担当者に「何でもやりますから」と言うと、「一緒にホノルル(マラソン)に出るぞ」と誘われた。高校時代にけがで陸上をあきらめて以来、運動をしていなかつた。「最悪だ」と思つたが、大会に向けて毎週皇居の周りを走るうち、仕事のストレスが軽くなつた。仕事抜きで付き合える仲間もでき、ランニングにのめり込んでいった。

結婚して2人の子どもに恵まれた。仕事もプライベートも充

## 死を意識する毎日

入院中、一流のアスリートの中にもがんから再起して、より優れた成績を残した人たちがいることを知る。大久保も紙に太

実していた2007年冬、ランニング中のけがで入院中、左右の睾丸の大きさが違うことに気づいた。睾丸がんだつた。腹部や肺、首にも転移し、3カ月間、抗がん剤治療を行い、手術は17時間に及んだ。がん細胞は壊死したと報告を受けたが、その後もつかの間、今度は抗がん剤の副作用で、発症から10年で生存率20%以下とされる肺線維症を併発する。酸素を取り込む能力が51%に落ち、24時間常に呼吸が苦しい。死を意識する毎日だった。

大久保は7月末に会社を辞め、9月に組織を設立した。患者から患者への情報提供や患者の就労支援事業を行うという。

「僕は走ることで、失った生活と体の機能を取り戻すことができた。生かされた命を無駄にせず、社会に恩返ししていくたい」と体の機能を取り戻すことがで

マジックで「サロマで自己新!」

と書き、病室に貼つた。ランニング雑誌でマラソン復帰した乳癌患者の記事も読んだ。編集部へ「勇気づけられた」と手紙を送ると返事が届いた。「何年先になつてもいい。あなたが励ます側になつてください」

だが、走ろうにも両足の筋肉が衰え、まっすぐ歩くことさえままならない。少し体を動かすと呼吸がぜいぜいする。

10カ月の入院後、自宅療養をへて、09年夏に元の職場にフルタイムで復帰した。

その年の秋。ようやく皇居を

1周できるまでに体が戻つた。

病気前は1周20分余りだったが、

1時間もかかる。マラソン復帰

## 闘病前のベスト更新を

# がん克服し100キロマラソン完走 生きるために走り続ける

がんになった。難病も併発した。絶望のふちで道を照らしてくれたのがマラソンだった。



大久保淳一さん(49)

がんを克服し、2013年6月30日のサロマ湖100キロウルトラマラソンを完走。これまでの全5回の完走のうち、セカンドベストだった



ブログ「病気を力に変える!」(<http://ameblo.jp/junichiokubo>)で、患者支援を兼ねて自身の体験を綴る